

『図書館に通う』（宮田昇）では、図書館についてどのように言及されているか・続

文学部日本語日本文化学科 教授

佐藤 毅彦

(承前)

5. 単行本『図書館に通う』について

前号では、後半の内容を予告していたが、その後、2013年5月に単行本が刊行されたため、それについての反応も含めて、予告とは異なる形になるが、前稿の続編を記述した。

宮田昇は、みすず書房のPR誌『みすず』で、「図書館に通う」という不定期連載（たいていは隔月）を続けていた（2010年3月～2012年12月）。連載終了後、半年ほど経過した、2013年5月、みすず書房より、単行本『図書館に通う 当世「公立無料貸本屋」事情』が刊行された（以下では、『図書館に通う』と表記する）¹⁾

単行本では、「はじめに 図書館は「公立無料貸本屋」ではいけないのか」(pp. iv～viii)が、巻頭におかれ、以下、連載時の掲載順に、1～15まで、さらに「16 『町奉行日記』と電子書籍」(pp.199-213)、「17 「異聞浪人記」と『知の広場』」(pp.214-229)、「むすびインフラとしての図書館」(pp.230-235)、「謝辞」(pp.236-237)が、加筆されている。巻末には、初出として、1～15が、「雑誌『みすず』二〇一〇年三月号～二〇一二年一二月号に、ほぼ隔月、掲載された」こと、16と17は、「書下ろし」であることが、表示されている。なお、『みすず』連載時は、「公共貸本屋」「無料貸本屋」「公共無料貸本屋」など、複数の言葉が、使用されていたが、単行本では、「公立無料貸本屋」という言葉が、一貫して、使用されている（この点については、次章で扱う）。

単行本の「はじめに 図書館は「公立無料貸本屋」ではいけないのか」の中では、業界紙に、「わが街の中央図書館」と「県内各地に出店している大型書店のわが街のJRの駅のそばのもの」がとりあげられており、この記事では「地域住民の要望に沿う使命がある」ことは認めたとうえで、現状は、「公立無料貸本屋の感がしてならない」と述べられていることを紹介している。²⁾宮田昇は、執筆の契機について、みすず書房から「図書館についてなにか書かないかというお誘いを受けた」が、図書館について、「なにも知らない」し、近年は、「エンターテインメントの本を読みふけるのに利用」(p.vii)するようになっていたことを述べている。また、「図書館の一利用者の視点から離れないように心掛けた」とするが、一方で「編集者、海外著作権実務者」「フリーランスの物書き、翻訳などを生業とした六十年余のキャリアがある」(p.viii)としている。

加筆された章においては、「16 『町奉行日記』と電子書籍」(pp.199-213)では、一人暮らしをしていた高齢の姉が倒れて入院した際に、大活字本を活用したことにふれ、山本周五郎『町奉行日記』を例にあげ、「創造の世界を膨らますことのできる活字の魅力」や、「ひとりで楽しめる読書の素晴らしさを確認」(p.205)したとしている。一方、電子書籍につ

いて、端末では、字を拡大できるが、「紙媒体で読書をしてきた高齢者が読書端末を受け入れられるだろうか」。「端末の大きさが小さい」のに対して、大活字本は「頁すべてが目に入ってきた」(p.207)とする。また、図書館予算が削られる中「利用者に貸すために」「端末を購入できるか」(p.209)との疑問を呈している。

「17 「異聞浪人記」と『知の広場』(pp214-229)では、時代小説家の滝口康彦について、藤沢周平と対比させ、編集者との出会いの大切さについて述べ、「図書館にも」「『対話』が必要だ」としている。「出版に関わった人間として、趣味としての読書に図書館を結びつけなかった」。「買って読まなければ」「身銭を切らなければ、きちんと評価できないと思う習性があった」(pp.220-221)という。図書館については、開館時間や開架の分類への戸惑い、当時の児童文学資料の選書への疑問など、をあげ、「図書館員の応対」について、「こちらが求めない読書『指導』を感じた」(p.222)としている。後に、エンターテインメントを趣味・娯楽として、読書に図書館を利用するようになり「図書館での『対話』の必要性」を感じた、それは「利用者の要望がきちんと図書館にとどき、図書館はそのための全ての情報を提供する対話」(p.225)であるとする。また、アントネッラ・アンニョリ『知の広場 図書館と自由』3)を取り上げ、図書館を「地域の市民の文化活動の中心地にする」広場感覚や、「図書館の文化講座では考えられない実用講座」「消費者団体や弁護士会のレクチャーやそれにとまなう無料の法律相談」の開催 (p.227)なども提案されていることを紹介している。

この章の終わりの部分、『図書館に通う』本文の末尾では「最近、東京に隣接するある都市に出来た図書館は、駅ビルのなかにある」。「おどろくべきことに」「この図書館の二階下に大型書店があるらしい」という施設が紹介されている。具体的な名称は書かれていないが、宮田昇が居住していると思われる神奈川県近隣で、「東京に隣接する」都市である、神奈川県川崎市立中原図書館は、2013年4月に開館。JR・東急武蔵小杉駅の「駅前複合ビル5・6階」にあり、保育施設なども併設され、図書館の下のフロアには、書店(有隣堂)が出店している。4)宮田昇は「どのような結果が出るのだろう。図書館利用が書籍の売れゆきにマイナスであるのかどうか、はっきり教えてくれると思う」(pp.228-229)と述べている。

宮田昇は「おどろくべきことに」としたうえで紹介しているが、図書館が書店と同一の建物内に設置されるケースは、すでに1980年代から実例がある。5)最近では、たとえば、東京周辺ではないが、2013年1月に開館した、一宮市立中央図書館(愛知)は、JR尾張一宮・名鉄一宮駅前の「i-ビル4・5階」に設置され、同じ建物には子育て支援関係の部署もあり、1階にある商業施設には、書店(三省堂書店)が入っている。

駅前に立地する複合施設などで、同一、あるいは、近隣のフロアに書店と図書館が同居するケースは、すでに相当数の先行事例が存在している。少なくとも、お互いが、足を引っ張り合って悪影響のみがもたらされるという否定的な評価しか存在しないのであれば、こうした事例が、次々に設置されていくことはなかったと思われる。書店と図書館との同じ建物での同居については、一定の効果が認められていると考えてよいのではないかと。

注)

1)宮田昇『図書館に通う』みすず書房、2013.5

2)能勢仁「増加一途の図書館貸出利用者」『新文化』2000.4.20、p.5

出版物の販売冊数が減少し、公共図書館の貸出冊数が増加しているデータをあげ、「最近の公立図書館の様子は市民迎合の“公立無料貸本屋”の感がしてならない」と述べている。

3)アントネッラ・アンニョリ、萱野有美訳『知の広場 図書館と自由』みすず書房、2011.5

4)2013年4月に開館したこの施設について、たとえば、地域情報を紹介するwebマガジン『はまれば.com』では、「武蔵小杉駅に出来る図書館が『国内最高レベル』らしい」と、多数の写真をまじえて、紹介している。

(http://hamarepo.com/story.php?story_id=1768)

また、日本図書館協会施設委員会による「第35回図書館建築研修会(2013年度) 地域活性化と図書館、その建築 地域とのつながりを考えた図書館建築」が、この図書館を会場として、2014年2月27日に、開催された。

5)図書館と書店が駅前の同じ建物に設置されている例として、比較的早い時期(1984年)に注目されたのは、京王聖蹟桜ヶ丘駅前のショッピングセンター「ザ・スクエア 2階」に開設された、多摩市立関戸図書館である(現在でも「あおい書店 聖蹟桜ヶ丘店」が同一のフロアで営業中)。

伊藤峻「駅前ショッピングセンターの中の図書館 多摩市立関戸図書館の開館」『図書館雑誌』1984.12、pp818-819

本学の立地する兵庫県阪神地区では、阪急川西能勢口駅前の「アステ川西 4・5階」の川西市立中央図書館(1991年)、阪急西宮北口駅前の「ACTA西宮東館 5階」の西宮市立北口図書館(2001年)などの例がある。首都圏では、JR川口駅前の「キュポ・ラ 5・6階」の川口市立中央図書館(2006年)、JR浦和駅前の「コムナーレ 8階」のさいたま市中央図書館(2007年)などは、大規模な中央図書館が、駅前の複合施設に入っており、同一の建物内では、書店も営業している。

宮田昇は、たとえば、大活字本を自宅にまで届けるサービスを提案しているところで「もうすでに図書館は、そのような試みをしているのかもしれない」(p.206)とし、「社会で話題になったテーマに関係ある本を、専門書も含めてできるかぎり広範に集めたものを開架に」ということについても、「すでにこれらは、一部の図書館でやっていることかもしれない」(p.226)という文章の後で、提案している。これらの例のように、いくつかのところでは、自分が知らないだけで、すでに図書館では取り組まれているのかもしれないが、という留保を付けて図書館サービスについて言及している。しかし、図書館と書店との、同一建物内での同居について論じた部分では、そうした文章はない。

6. 「無料貸本屋」・『図書館に通う』の図書館」についての再考察

宮田昇は、単行本の冒頭、「はじめに」で、「図書館がはじめて『公立無料貸本屋』では

ないかと問題にされたのは、二〇〇〇年（平成十二年）である」として、業界紙の記事をあげている。1)『みすず』連載時は、「無料貸本屋」「公共貸本屋」「公共無料貸本屋」が使われていて、「公立無料貸本屋」という言葉は使われていなかったが、単行本では、サブタイトルが「当世『公立無料貸本屋』事情」とされ、本文中でも「公立無料貸本屋」という表現に統一されているのは、この記事をつまえていると思われる。

「無料貸本屋」という言葉に関して、前稿では、図書館を貸本屋と対比させた論議は以前からあったが、「端緒のひとつは、林望が、月刊誌『文藝春秋』に発表した「図書館は無料貸本屋か」というタイトルの文章であるが、それに先立ち、当時の公共図書館の状況について、津野海太郎が日本図書館協会発行の『図書館雑誌』に、「市民図書館という理想のゆくえ」を發表し、図書館のあり方について一石を投じたことが、議論のきっかけとなった」と指摘した。2)

図書館関連業界では、林望は、『文藝春秋』に先の記事が掲載される約1年前、前記の『新文化』の記事が發表される半年ほど前に、「第1回図書館総合展」において、「図書館へ行く」と題した講演（1999年10月14日）を行っている。3)そこでは、公共図書館での資料選択について、「ベストセラーはせいぜい三冊買えば」いい、などとする持論を展開している。また、先に、津野海太郎が、『図書館雑誌』に「市民図書館という理想のゆくえ」を發表していることを紹介したが、その冒頭の部分には「公共図書館は無料貸本屋か？」という見出しがつけられている。4)津野海太郎は、『マガジン航』に発表した『図書館に通う』の書評の中で、宮田昇が、『新文化』に掲載された文章をもとに、「図書館がはじめて『公立無料貸本屋』ではないかと問題にされたのは、二〇〇〇年（平成十二年）である」と記述している点について、「その二年まえ、私は『図書館雑誌』によせた「市民図書館という理想のゆくえ」という文章で「なにが公共図書館だよ、ただの貸本屋じゃないの」と批判して、図書館員諸氏の怒りを買ったおぼえがある」と主張している。5)

宮田昇は、自らの「通う」図書館について、単行本でも、固有名詞をあげていないが、『みすず』連載時の文章を取り上げた前稿では、分館数・市民図書室の数、前田純敬の件、などから、「神奈川県藤沢市」の図書館であると思われることを指摘した。6)なお、先にあげた『マガジン航』の書評で、津野海太郎は、「宮田さんの「わが街」は鎌倉市（人口は17万人）らしい」としている。

単行本『図書館に通う』「はじめに」の中で紹介している『新文化』の記事について、宮田昇は「偶然にもその例に挙げられたのは、わが街の中央図書館で、書店も県内各地に出店している大型書店のわが街のJRの駅のそばのものである」(pp.iv-v)と記述している。前述の『新文化』の記事には、「図書館を書店に見立ててみよう」「藤沢市図書館の書籍の売上は約三六億円となる」「藤沢市内一の大型書店、有隣堂藤沢店であってもこれほどまでは売れないであろう」との記述があることから、宮田昇の「わが街」の図書館は、藤沢市図書館であると考えられる。

注)

1)能勢仁「増加一途の図書館貸出利用者」『新文化』2000.4.20、p.5

なお、『新文化』で、『図書館に通う』を取り上げて紹介している、コラム「注目！この本」『新文化』2013.6.27、p.5、では、「無料公立貸本屋」について、「2000年に小紙の記事に初めて登場した言葉だ」としている。

2)佐藤毅彦「『図書館に通う』(宮田昇)では、図書館についてどのように言及されているか」『甲南国文』vol.60、2013.3、pp.21-33

3)講演の内容は、雑誌『図書館の学校』に掲載されている。

林望「図書館へ行こう」『図書館の学校』No.001、2000.1、pp.2-25

この講演で、林望は、「公共図書館」は、研究図書館とは違い「住民サービス」が「第一義で」「ある程度はベストセラー」を「一般市民の利用に供する」ことは「納税者サービスという意味から見ても正しい」が、「せいぜい三冊買えばよろしい」。「いつでも貸出中で借りられないと思ったら、他の本を読むかもしれない」などと、持論を展開している。この講演の内容の延長線上で書かれたと思われるのが、前稿でも紹介した以下の記事である(なお、近年は、図書館総合展は、「パシフィコ横浜」を会場として、開催されているが、この時の会場は、JR有楽町駅前の「東京国際フォーラム」であった)。

林望「図書館は無料貸本屋か ベストセラーの『ただ読み機関』では本末転倒だ」『文藝春秋』2000.12、pp.294-302

当時、こうした点については、複数の作家の発言があったが、たとえば、「浅見光彦」シリーズなどで多数の読者をもつ内田康彦は、阿川佐和子との対談で、阿川「私の本を愛読してくれる方って、どうも本を買わないで、図書館で借りる人が多いらしいんですよ」、内田「僕の本も図書館で借りて読む人は多いですよ。僕は、図書館に依頼された講演でも半ば本気で言うんです。『図書館は作家の敵だ』って(笑)」「でも、置いてくれるだけで幸せだと思わなくちゃいけないんでしょうね」と述べている。

「阿川佐和子のこの人に会いたい 作家 内田康夫」『週刊文春』vol.41、no.40、1999.10.21、p.55

4)津野海太郎「市民図書館という理想のゆくえ」『図書館雑誌』vol.92、no.5、1998.5、pp.336-338

5)津野海太郎「無料貸本屋でどこがわるい？」『マガジン航』2013年7月9日

(http://www.dotbook.jp/magazine-k/2013/07/09/what_is_wrong_with_free_public_libraries/)

6)佐藤毅彦「『図書館に通う』(宮田昇)では、図書館についてどのように言及されているか」『甲南国文』vol.60、2013.3、p.22

7.『図書館に通う』はどのように受け止められたか

単行本『図書館に通う 「当世無料公立貸本屋」事情』は、2013年5月に刊行され、そ

の直後から、複数のメディアで、書評や著者へのインタビューが掲載された。

○『毎日新聞』評・井波律子 1)

「出版界の大ベテラン」が「公共図書館の変遷、現状、問題点などを、具体的かつ詳細に描き出したものであり、まことに新鮮で読みごたえがある」としている。文末では、「仰天するような凄まじい数の利用者にあふれる公共図書館の実情を浮き彫りにし、知られざる図書館文化の現在をありありと伝える好著だといえよう」とまとめられている。

○『朝日新聞』「著者に会いたい」文：野口健祐 2)

「ひと昔前、図書館の新刊文芸書の貸し出しをめぐり、出版社、著者と図書館側とで論議になった。いまなお、くすぶっている」ことが紹介され「娯楽としての読書に利用する身から、体験をつづった」と紹介する。『素人』ではあるまいと思っていたら、その通り」に続けて、早川書房入社以降の宮田昇の経歴が紹介され、「今作にも、図書館を介した、本と人との出会いが数多く描かれている」と評されている。

○『東京新聞』小田光雄（文芸評論家）3)

宮田昇を「戦後出版史における重要な証人」とし、「図書館予算減少状況を救うのは利用者による貸し出しの増加、それに伴う図書の充実であり、一方では情報開示による市民参加型の資料収集保存と幅広い収書だとみなす」と著者の見解を紹介している。一方、評者の小田光雄は、「私見」として「三年前から貸出総数はすでに出版業界の一年間の販売部数を上回る七億冊以上に達している。これも新たな図書館状況であり、さらなる注視が必要な時期に入っていると思われる」としている。

○（月刊）『文藝春秋』「著者は語る」文：佐久間文子 4)

副題の「当世『公立無料貸本屋事情』」が「人気作家の本をたくさん揃えて『図書館は無料貸本屋か』と揶揄されることを踏まえている」と紹介し「利用者の立場で『無料貸本屋でいい』としながら、この本には出版人としての経験に裏打ちされたさまざまな提案が盛り込まれている」としている。文末では「現役の出版人こそ図書館を利用した方がいい。そこから見えてくるものがいろいろあるはずですよ」という宮田昇の言葉を紹介している。

これらは、単行本の刊行直後に、全国的に流通する新聞・雑誌に掲載されたもので、いずれも好意的な取り上げ方をしていると言えよう。図書館をテーマとした本が、全国紙・総合雑誌などの媒体に、刊行直後にこれほど取り上げられることは少なく、「公立無料貸本屋」という一般には、刺激的とも思われるサブタイトルが目をつけたこともあるが、やはり、出版関連業界でのこれまでの宮田昇の業績が、こうした扱いをもたらしたと言えよう。ただ、全国紙の書評欄は、文章量が限られており、『朝日新聞』や『文藝春秋』は著者へのインタビューということもあって、内容の要約や、著者の著作の執筆意図の紹介が主になっており、詳しい分析がなされているとは言い難い。

これらの記事の執筆者のうち、小田光雄は『図書館逍遥』の著者であり、出版関連業界について発言を続ける中で、図書館にも言及してきている。5)『図書館に通う』の書評では、2010年から図書館の貸出冊数が7億冊を超え、書籍販売部数を上回ってきていることにつ

いて、「さらなる注視が必要な時期に入っている」と表現しているが、小田光雄は、みずから継続的に発表している『出版状況クロニクル』では、この点について、1999年～2013年までの、図書館数・個人貸出総数と書店数・書籍推定販売部数を対比させた表を作成し、それが「書店数の減少と平行に図書館が増え、同様に個人貸出数も伸びていったことを如実に示して」おり、「館数や予算の増加が止まりつつある現在、公と私における出版物の意味も含め」考える必要がある、と述べている。6)

○『マガジン航』「無料貸本屋でどこがわるい？」津野海太郎 7)

先にも指摘したが、「無料貸本屋」という言葉は、津野海太郎が、日本図書館協会から刊行されている『図書館雑誌』1998年5月号に発表した「市民図書館という理想のゆくえ」という文章の中で使われている。その津野海太郎は、『マガジン航』に『図書館に通う』の書評を発表している。自らは「一貫して公共図書館の過度の『無料貸本屋』化をおおっぴらに批判してきた」とする津野海太郎は、「著者は私のちょうど十歳上」であり、「私同様、ひとりの退職老人として公立図書館のヘビーユーザーと化して」いた、と、宮田昇を紹介し、それに続けて、『図書館に通う』の内容を紹介している。

津野海太郎は、『『公共無料貸本屋』肯定論に反感をもったことはいちどもない』「近所の図書館について熱心に語る人は大勢いる。でも私をふくめて、昨今の図書館における予約待ちのあまりの増加ぶりや蔵書の汚さについて、ここまで具体的に語った人はいなかった。そのことだけをとりても、これは書かれるべくして書かれた貴重な本だ」とする。

一方、「私は、原理的にも現実的にも、公共図書館を無料貸本屋の枠に押し込めることにはムリがあると考えている」「一千人を超えはじめた予約待ちの現状が、図書館を無料貸本屋化することのむずかしさを如実に示している」と述べる。そして、宮田昇の期待する方向性について、「①もし日本の出版社が新刊本の文庫化（低価格化）の時期を思い切って早めれば、図書館の予約待ちの列にならぶ人びとの多くはかならず文庫本に流れる」「②そうなれば短期的な人気本（読み捨て本）の複本購入にも歯止めがかかり、高価格のハードカバー（かたい本）に予算を振りむける余裕が生まれる」「③ひいてはそれが、この国の出版業界に『一気に売るマス販売』と『長く売りつづける単行本出版』との程よいバランスをよみがえらせるきっかけになる」とまとめている。しかし「日本の図書館界や出版業界の習性を考えれば、この方向で現在の隘路が突破される可能性があるとは、とても思えない」とし、「Eブックスの時代になろうとなるまいと、なにひとつ変わらない。そして、『理想的な公立無料貸本屋』という図書館の夢だけがあとにのこされる。だとしたら、図書館の無料貸本屋化を支持する宮田さんと」「『公共図書館という夢』の破壊を批判する私とのあいだに、はたしてどれほどのちがいがあのだろうか」と結んでいる。

宮田昇が長く関係してきた出版業界の専門紙・誌では、たとえば、『新文化』『週刊読書人』『出版ニュース』で、それぞれ『図書館に通う』を紹介している。

○『新文化』コラム「注目！この本」7)

地域の図書館がシニア層でにぎわっていることを述べ、「宮田昇氏もそのひとりだ」とす

る。連載から単行書として刊行されたことを紹介し、サブタイトルの「公立無料貸本屋」について、「2000年に小紙の記事に初めて登場した言葉だ」とし「記事の趣旨が、その後論争へと発展した」とする。「娯楽系読書を図書館で楽しむ立場となった著者はそれに改めて向き合い、現状を検証し提言を行う」と紹介する。「ときには60年余に及ぶ出版界での経験から生まれた鋭い洞察であり、ときには一利用者の目線による素朴な感想・疑問である」とし、その主張は「本の売上の低下を図書館のせいにはならない、図書館側にも『タダで貸してやる』的な旧来の意識・運営から市民参加・情報開示型への転換が必要だという」と、まとめている。

○『週刊読書人』コラム「風来」8)

冒頭で「副題がちょっと皮肉っぽい題名の本」と紹介し、宮田昇の略歴をあげたあと、『図書館に通う』について、全体の構成、前半の第1章・第2章の内容について、紹介しているが、公立図書館やその資料については、言及がない。

○『出版ニュース』「ブックハンティング2013」中川隆介（評論家）9)

「出版界の大ベテランによる実感的エッセイ」と紹介し「全体をあるテーマごとに串刺しに見てゆく」として「著者とは必ずしも問題意識が一致しているとは言いがたい者が読んで紹介」という。図書館については、「公立無料貸本屋」という言葉が重要な視点だとし、結論的見解は、「読書に教養と娯楽、資料と通俗の差はない、図書館でいま必要なのは利用者と図書館の対話であり、読書指導ではなく読書情報の提供だ、図書館は『公立無料貸本屋』であってよい、一層の充実が求められている」としている。文末では「図書館についての実感的な体験報告と提言があり、また作家論、作品論、出版業界論など興味深い論議が多く盛り込まれていて飽きない」と述べている。

『図書館に通う』で取り上げられている、公立図書館の関係者も多く所属していると思われる図書館関係団体が刊行している、日本図書館協会『図書館雑誌』、日本図書館研究会『図書館界』、図書館問題研究会『みんなの図書館』、では、2013年中に、書評にはとりあげられていない。10) なお、公益財団法人図書館振興財団機関誌『図書館の学校』では、宮田昇へのインタビューが掲載されている。

○『図書館の学校』「interview」取材・文 品川裕香 11)

宮田昇は、教養、調査や資料集めに使ってきた図書館を「純粹に読書のために地元の図書館を利用するようになったのは、仕事から引退した2007年ごろから」と述べている。「これまで気づかなかった課題」として、人気の作品が長く待たされること、本の汚損や、席が少ないことなどをあげ、「図書館がどういう本を購入したのか、情報が開示されないのも問題です」と述べる。また「敷居が高い」「上から目線を感じる」「書評情報を生かしているのか」など問題を提起し、「今後問われるのは、いかに情報の発信基地になるかということ。そのためには、著者も出版社も図書館を敵視してはいけません。出版社は図書館に、図書館は利用者にもきめ細かい情報を提供していくことが大事です」「図書館には地域市民の文化活動の拠点になってほしい」と述べている。

一般の全国紙・総合雑誌には、刊行後、比較的早い時期に、書評や著者へのインタビューが掲載されたのに対して、関連業界である出版界や図書館界では、反応がうすいように思われる。その中でも「無料貸本屋」として図書館が利用されることに対し、ある点では、利害が対立しているともいえる出版界の関連紙・誌では、業界の先達である宮田昇に敬意を表しつつ、『図書館に通う』の内容を紹介している。

一方、図書館は「いっそうの充実を求められているインフラでもある」(p.235)と、ある意味でエールを送られているともいえる図書館界では、この著作に対して、積極的な受け止め方がなされていないようにみえる。たとえば、数年前に刊行された、井上真琴『図書館に訊け!』(ちくま新書 2004)、千野信浩『図書館を使い倒す ネットではできない資料探しの「技」と「コツ」』(新潮新書 2005)の著者は、全国図書館大会や図書館総合展の講演者・パネリストとして、招聘されることが複数回に及んだが、『図書館に通う』に関しては、そうした状況にはなっていない。12)

『2005年の図書館像』(文部省、2000)、『地域の情報ハブとしての図書館(課題解決型の図書館を目指して)』(文部科学省、2005)、『これからの図書館像』(文部科学省、2006)、など、公立図書館の近未来の方向性を示唆した政策文書では、「課題解決支援サービス」や「役に立つ」図書館サービスが志向されてきた。宮田昇『図書館に通う』では、信州(長野県)を訪問した際の地域の図書館での多様な資料との出会い(「14 『暁の死線』と地域の図書館」)や、『知の広場 図書館と自由』の中で、従来の枠にとらわれない講演会実施が提案されていることを紹介する(「17 「異聞浪人記」と『知の広場』」)など、課題解決支援サービスに近い図書館サービスにもふれているのだが、サブタイトルにある「無料公立貸本屋」という言葉が、強いインパクトを感じさせるため、図書館界の関係者から注目度が低くなってしまっているのではないか。13)

注)

- 1)「知られざる読書文化の現在に迫る 今週の本棚」井波律子・評、『毎日新聞』2013.6.16、p.7
- 2)「利用者の視点で体験つづる 著者に会いたい」文：野口健祐、『朝日新聞』2013.6.30、p15
- 3)「借りて読む楽しみに誘う」評者：小田光雄(文芸評論家)、『東京新聞』2013.6.30、p.9
同一の内容で、『中日新聞』2013.6.30、p.13、にも掲載された。
- 4)「著者は語る 14 文藝春秋BOOK倶楽部」文：佐久間文子、(月刊)『文藝春秋』2013.7、p.414
- 5)小田光雄『図書館逍遥』編書房、2001

小田光雄は、自身が継続的に発表している『出版状況クロニクル』の中で、2013年4月に開館した、武雄市図書館を扱っている『図書館が街を創る 「武雄市図書館」という挑戦』ネコ・パブリッシング、をとりあげ、「買ったわけではなく、図書館に入っていたので、出されたことを知った」。「TUTAYAで平積みされているのも見た」ことを指摘し、「図書館

入荷や販売状況、及び価格設定、送本はこの一冊がプロパガンダ本以外の何物でもないことを示している。そこには本や読者に対する思索は何も含まれていない。「図書館という『ハコモノ』と『イメージ』をめぐる武雄市とその市長、TUTAYA のパフォーマンス本と見なすべきだろう」と批判している。これと対比するかたちで、宮田昇『図書館に通う』にふれ、「後期高齢者から見た『公立無料貸本屋』の実情が、借りて読んだ本を通じて語られている。このような視点と語り口こそは、『図書館が街を創る』にまったく欠けていたもの」としている。

『出版状況クロニクル 61』(2012年5月1日～5月31日)

(<http://d.hatena.ne.jp/OdaMitsuo/20130601/1370010126>)

また、次の号では、1999年～2013年までの、図書館数・図書館貸出総数と書店数・書籍推定販売部数を対比させた表を掲載し、「書店数の減少と平行に図書館が増え、同様に個人貸出数も伸びていったことを如実に示している」。「そうした図書館状況を当てこんで、明らかに『造り本』めいた多くの本が出されている」として、漆原宏『ぼくは、図書館がすき』をあげている。「日本図書館協会から、わずか90ページ足らずの小さな写真集にしては高すぎる2800円で刊行されている。これは公共図書館、日図協などのプロパガンダ本と見なすしかない内容」で、「高定価にもかかわらず、必読図書のようなかたちで公共図書館に入っているようだ」と批判し、「一方では市民のリクエスト選別も始まっている。図書館側の選書の意味も問われなければならないだろう」と述べている。

『出版状況クロニクル 62』(2013年6月1日～6月30日)

(<http://d.hatena.ne.jp/OdaMitsuo/20130701/1372604437>)

上記の中で、小田光雄が取り上げた本は、以下のものである。

楽園計画・編『図書館が街を創る 「武雄市図書館」という挑戦』ネコ・パブリッシング。

2013

漆原宏『ぼくは、図書館がすき』日本図書館協会、2013

なお、『図書館が街を創る』については、『朝日新聞』にこの本を扱った記事が掲載されているが、その内容は、書評というより、武雄市図書館を訪問して、実際にカードも作ってみた、という点から、武雄市図書館そのものを論じたものになっている。

沢辺均(『ず・ぼん 図書館とメディアの本』編集委員、ポット出版会長)「武雄市図書館の試み 『知の提供』の手段とは (ニュースの本棚)」『朝日新聞』2013.11.3、p.11

6)津野海太郎「無料貸本屋でどこがわるい？」『マガジン航』2013年7月9日

(http://www.dotbook.jp/magazine-k/2013/07/09/what_is_wrong_with_free_public_libraries/)

7)「注目！この本」『新文化』2013.6.27、p.5

8)「風来」『週刊読書人』2013.11.29、p.9

「風来」『週刊読書人』2013.12.6、p.7

9)「ブックハンティング 2013 宮田昇著 『図書館に通う 当世「公立無料貸本屋」事情』

中川隆介（評論家）・評『出版ニュース』2013.7月上旬号、pp30-31

10)たとえば、先にあげた小田光雄によって、「プロパガンダ本」と批判されている、漆原宏『ぼくは、図書館がすき』は、『図書館雑誌』『みんなの図書館』の書評に取り上げられている。

近藤幸子「図書館員の本棚 『ぼくは、図書館がすき』」『図書館雑誌』vol.107、no.11、2013.11、p.717

嶋田学「ほん・本・Book 『ぼくは、図書館がすき』」『みんなの図書館』no.438、2013.10、pp.81-83

『図書館雑誌』巻頭のコラム「窓」では、上田修一が『図書館に通う』にふれ、「筆者は八十歳代」で「蔵書検索システムを駆使して求める本を手に入れ、それまで公共図書館に抱いていたイメージを少しずつ修正していく」。「宮田氏のような自分の要求水準を持ち、賢い使い方をする利用者が増えている」と紹介している。

上田修一「窓 公共図書館の利用行動の変化と資料費」『図書館雑誌』vol.107、no.9、p.552
11)「interview 今、一市民として、街の図書館に通う日々と思うことは 宮田昇さん」取材・文 品川裕香（教育ジャーナリスト）、『図書館の学校』2013年秋号、pp.48-49

12)井上真琴『図書館に訊け！』筑摩書房（ちくま新書）、2004

千野信浩『図書館を使い倒す ネットではできない資料探しの「技」と「コツ』』新潮社（新潮新書）、2005

これらの著作の内容と図書館界の反応については、下記で扱った。

佐藤毅彦「図書館利用法指南本の系譜とその図書館観 その1 新書版図書館利用法指南本『図書館に訊け！』『図書館を使い倒す』のケースについて ―図書館はどうみられてきたか・9―」『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』vol.44、2008.3、pp.1-13

上記では、井上真琴は、図書館総合展のフォーラムで、第7回（2005）から第9回（2007）まで、講師・パネラーをつとめ、全国図書館大会岡山大会（2006）でも事例発表を行っていること、千野信浩は、第7回図書館総合展（2005）のフォーラム、全国図書館大会岡山大会（2006）で、講演・パネラーをつとめているほか、両者とも、多数の図書館関係の会合に講師・パネラーとして招聘されていることを紹介している（p.11）。

13)ちなみに、『朝日新聞』『文藝春秋』『図書館の学校』に掲載された著者のインタビューの中で引用されている宮田昇の「発言」の中には「無料貸本屋」という言葉は出ていない。『文藝春秋』には、「利用者の立場で『無料貸本屋』でいいとしながら」という箇所があるが、これは、インタビュアーが著書の内容を要約した部分で、宮田昇の発言ではない。

8. 2013年の図書館をとりまく状況の中での『図書館に通う』

全ページ（約400p）カラー刷、A4版のグラフィック誌、『婦人画報』2013年11月号（定価1,200円（税込）、1冊の重量は約1.3kg）に、ある図書館が、見開き2ページで掲載された。「さあでかけましょう、本屋さんぽ」と題した、書店の特集記事に「図書館もある本

屋さん 蔦谷書店 武雄市図書館」として掲載されたこの施設は、2013年4月の開館以降、図書館界でも話題を集めてきた。1)「最前線をゆく図書館を取材」という『つながる図書館』(ちくま新書)では、「かつて、こんなに人々の話題となった図書館があっただろうかと思うほど、絶賛から批判まで、武雄市図書館は毀誉褒貶にさらされ、常に論争の渦中にある」(p.146)と紹介されている(『つながる図書館』では、『図書館に通う』についてもふれている部分(pp.32-34)がある)。2)

宮田昇『図書館に通う』は、前章でみたように、出版直後から全国紙・総合雑誌に書評や著者インタビューが掲載され、話題となったが、その後の、図書館界での注目度は、武雄市図書館に比べると高くはない。第15回図書館総合展(2013年10月29日~31日)では、フォーラム「武雄市図書館”を検証する」が開催され、多数の参加者を集めた。3)『図書館に通う』については、別のフォーラム「出版市場としての図書館、読書基盤としての図書館」で、単行本が刊行されたことが紹介されたが、武雄市図書館のように、その内容について詳しく論じられたわけではない。4)武雄市図書館について、必ずしも肯定的な評価ばかりでないことは、先に示した『つながる図書館』での記述や、その後のメディアでの扱われ方にも表れている。5)一方、『図書館に通う』については、書評や著者のインタビューで、内容や著者の執筆の意図は紹介されているが、それ以外の論評は、少ない。6)

現実の公立図書館現場では、高齢の利用者が多く見られるようになってきている状況がある。図書館関係者のがわでは、そうした人たちを意識したサービスの必要性は否定しないが、一方で、現在は図書館を利用していない層の利用や、娯楽のための資料の貸出以外の利用形態を、拡大していくことにより、行政評価や外部評価の向上、ひいては、図書館の振興や図書館職員の専門性の認知につなげていきたい、との意識があるようにも思える。資料費をはじめとして、図書館関係予算全般が縮小傾向にある中で、特に図書館から働きかけをしなくても、平日の早い時間から図書館の閲覧席の座席を占有している高齢の利用者層や、娯楽のための資料提供を求める利用者への対応よりも、情報提供サービスの一形態として「ビジネス支援」などの課題解決支援サービス、行政や民間団体など他部門との連携により新たな利用者層・利用形態の開拓につながるサービス、などを、図書館がわが、高い優先順位で考えているという面があるのではないか。近年、自治体の行政施策全般において、高齢者に対する過酷な扱いが報道されている。たとえば、『朝日新聞』に連載されている「報われぬ国 負担増の先に」では、高齢者に対する自治体のこれまでにない対応の事例が紹介され、反響をよんでいる(2014年2月現在、連載中)。7) そうした中では、図書館でのサービス内容にも、今後、よりきびしい目がむけられる可能性がある。

宮田昇『図書館に通う』の巻末では、「書籍の売上低下は、図書館のせいにはならない。図書館は「公立無料貸本屋」であってよいばかりか、いま、いっそうの充実を求められているインフラでもある」と述べられている。一方、公立図書館の資料の貸出サービスについて、小田光雄は「三年前から貸出総数はすでに出版業界の一年間の販売部数を上回る七億冊以上に達している。これも新たな図書館状況であり、さらなる注視が必要な時

期に入っていると思われる」8)と述べ、津野海太郎は「私は、原理的にも現実的にも、公共図書館を無料貸本屋の枠に押し込めることにはムリがあると考えている」「一千人を超えはじめた予約待ちの現状が、図書館を無料貸本屋化することのむずかしさを如実に示している」という見解を表明している。9)ただ、宮田昇『図書館に通う』の論点は、娯楽のための資料の提供という「公立無料貸本屋」論議だけではなく、図書館サービスの他の面にも及んでおり、宮田昇の著作全体にみられる提言に関して、さらに、検討していく必要があるのではないか。

注)

1) 『婦人画報』no.1324、2013.11、pp.134-135

「さあでかけましょう、本屋さんば 足を運ばずにはいられない本屋さん」という特集(pp.124-143)の中で、「本屋さんと図書館が融合した全国初の新しい試み」として、「館内の入り口付近は雑誌を中心とした新刊書籍の販売コーナー」があり、「その先に約20万冊の蔵書を揃える図書スペース」を設置、分類法を変更し、来館者数が4倍になった。「新しい本のある空間として全国から視察が訪れるほど注目」を集めていることが紹介された。

武雄市図書館についての報道は、多数あるが、たとえば、『朝日新聞』2013.9.11、p.11、「オピニオン」のページには、「耕論 図書館の未来」の中で、宮田昇『図書館に通う』でも言及されている『知の広場 図書館と自由』の著者、アントネッラ・アンニョリ、くすみ書房社長、久住邦晴（北海道書店商業組合理事長）、とともに、武雄市図書館の運営を受託している、高橋聡（CCC・図書館カンパニー社長）がインタビューの対象者となっている。

2) 猪谷千香『つながる図書館』筑摩書房（ちくま新書）、2014、p.146

「最前線をゆく図書館を取材」は、表紙に掲載されている、内容紹介の一節。

『朝日新聞』2014.2.16、p.13、では、新書の欄にこの本が取り上げられ、「副題『コミュニティの核をめざす試み』は、どれも訪ねてみたくなった」とされている。

『つながる図書館』で取り上げられている施設をみると、前半では、武蔵野プレイス、千代田図書館、小布施町まち図書テラス、鳥取県立図書館、など、新たな方向性で、従来とは異なる利用者層を開拓したり、利用者層そのものを拡大したと思われる図書館が紹介されている。後半は、神奈川県立図書館の「サービスの削減や集約」の問題、武雄市図書館と伊万里市民図書館との対比、「電子図書館」、「マイクロライブラリー」、海士町図書館、などについて、記述されている。

宮田昇『図書館に通う』については、千代田図書館を紹介している章で、『図書館に通う』を蔵書検索すると貸出中だったので、「コンシェルジュ」のブースで、在庫のある書店をきき、購入して読んだこと、につづけて、内容を簡潔に紹介している（pp.32-34）。

3) フォーラム「“武雄市図書館”を検証する」10月30日 10:30～12:00 展示会場内

樋渡啓祐武雄市長、高橋聡 CCC プロジェクトリーダー、が、武雄市図書館のコンセプトや開館後の利用状況を紹介した。そののち、実際に、この図書館を訪問して、利用者の館

内での行動実態などを調査した糸賀雅児慶応義塾大学教授が、図書館情報学の研究者としてコメントした。コーディネーターは、湯浅俊彦立命館大学教授。

4)フォーラム「出版市場としての図書館、読書基盤としての図書館 出版社と図書館界の本音がぶつかるフォーラム」10月31日 10:30~12:00 展示会場内

『図書館に通う』が連載された、雑誌『みすず』を発行しており、単行本も手がけた、みすず書房の関係者である、持谷寿夫（一般社団法人日本書籍出版協会副理事長・株式会社みすず書房社長）が、パネリストの一人として登壇し、単行本の刊行に言及した。

5)猪谷千香『つながる図書館』筑摩書房（ちくま新書）、2014、では、「今、武雄市図書館への評価を拙速に下すことはできないと考えている。未来にならなければ、その本当の価値はわからないのではないだろうか」（p.165）と、記されている個所もある。

開館から10ヵ月が経過しようとしていた2014年1月下旬、『神奈川新聞』「論説・特報」ページで、「佐賀・武雄市図書館に行ってみた 上・下」（斉藤大起による署名記事）が掲載された。「今まで図書館に縁遠かった人が来てくれるようになった」という樋渡啓祐武雄市長のコメントを掲載する（上）一方で、「率直に言って、公設民営のブックカフェだと思う」という、糸賀雅児慶応義塾大学教授の「図書館総合展」での発言も紹介している（下）。

「カフェ併設 来館者3倍に 商業施設の発想が先行 『公共』置き去り？ 佐賀・武雄市図書館に行ってみた 上」『神奈川新聞』2014.1.20、p.29

「本当に『高評価』？ 薄れる知の役割 佐賀・武雄市図書館に行ってみた 下」『神奈川新聞』2014.1.21、p.21

6)宮田昇が、80代と高齢であり、出版界でこれまでに大きな業績を残してきていることから、『図書館に通う』に言及することへのためらいが存在しているとも考えられる。

7)「高齢者放り出す自治体 空室目立つ最後のとりで 養護老人ホーム「措置控え」横行 老夫婦、野宿まで 衰弱 80歳も「対象外」（報われぬ国 負担増の先に）」『朝日新聞』2014.1.27、p.4、では、養護老人ホームへの入所者が減少していることについて、「地方への税源移譲」をきっかけに「市町村の全額負担」になり、「国からの地方交付税で手当てされるが、財政難でほかの予算にまわす」自治体があることが紹介されている。

その後、「お泊りデイ 「もうけ優先」「欠かせぬ救世主」 措置変え ホーム入所「自治体の胸三寸」（反響編 報われぬ国 負担増の先に）」『朝日新聞』2014.2.17、p.4、では、「お泊りデイ」「措置変え」を報じた記事に対して、寄せられた意見が掲載された。

8)「借りて読む楽しみに誘う」評者：小田光雄（文芸評論家）、『東京新聞』2013.6.30、p.9

9)津野海太郎「無料貸本屋でどこがわるい？」『マガジン航』2013年7月9日

（http://www.dotbook.jp/magazine-k/2013/07/09/what_is_wrong_with_free_public_libraries/）

*引用文献中の「公立図書館」「公共図書館」の表記については、原文のまま、とした。

（本文中で参照したwebページは、2014年2月の時点で公開されていたものです。